

【実践報告】

教員養成における動画教材作成の意義

——算数科と国語科の実践から——

今崎 浩・橋村 勝明

The Educational Significance of Video Teaching Materials in a Teacher Training Course The Cases of Japanese Language and Arithmetic

Hiroshi Imazaki and Katsuaki Hashimura

1 はじめに

広島文教女子大学（以下、本学）人間科学部初等教育学科には教職課程が設置されており、学科の開設以来幼稚園教諭及び小学校教諭の養成をおこなってきた。本学における教員養成は、教員として求められる普遍的能力はもちろんのこと、社会の変化に応じて今日的な課題に対応できる教員養成であるように努めてきた。

例えば、いわゆる「中1ギャップ」が課題として意識されることを背景として、本学初等教育学科では平成23（2011）年度入学生より中学校教諭（国語）一種を取得できるよう課程を設置した。これは、中学校の教育内容を踏まえた上での初等教育を意識したものであり、また国語科であるのは全ての教科に関連する言語活動を重要視したためである¹。また、「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」（平成24年8月28日中央教育審議会答申）において、教科に関する科目と教職に関する科目とを架橋するような指導内容が求められた。

2. 教員養成、採用から初任者の段階の改善方策 （学部における教員養成の充実）

○教科と教職の架橋の推進、全学的な体制の整備、個性化・機能別分化の推進、質保証の改革により、必要な資質能力の育成を徹底する。（下線筆者）

これを受けて、一部の科目についてシラバスを修正した²。このように、社会の要請を受けて対応してきた部分がある一方、逞しい実践力を養成するための教育実習（観察実習）の充実等については変わらず取り組んできたところである。

本稿は、このような本学における教員養成の取り組みの一つとして、小学生対象の動画教材作成を通じた実践の報告である。なお、動画教材を作成するに際しては、平成25年度の文部科学省 ICT 活用推進事業の採択にかかる、本学のネットワーク環境の整備と共に設置された動画

1 平成24年7月には、「小中連携、一貫教育に関する主な意見等の整理」（中央教育審議会初等中等教育分科会学校段階間の連携・接続等に関する作業部会）が纏められている。

2 橋村勝明「『教科に関する科目』と『教職に関する科目』とを架橋する内容について」（『広島文教女子大学教職センター年報』第1号、2013年2月）

撮影スタジオを活用したことを付記する。

2 授業分析の観点から見た動画教材作成の意義

授業分析の方法としては、まず観察と筆記による記録が基本であることはいうまでもないが、記録性を重視するのであれば動画として記録する方法もある。観察による方法では情報量に限界があり、再現性が期待できないためである。授業分析の際には、学習指導案からは教材研究に関する事柄、動画からは、教師の話し方や視線、児童への個別指導の有り様などとなり、それぞれにその利点を活かした用いられ方がされる。

教員養成課程においては、学習指導案作成についての指導は講義内で指導がなされる一方で、話し方などについても一部科目で個別に指導しているが、その指導の割合としては模擬授業、教育実習で経験的に身につけてゆく方が大きいのではないかと考える。また、教師の発話の一つひとつに目を向けた指導は、実際のところ行き届かせるのは困難であると思う。そこで、実際の教育現場では考えた内容をすぐに発話するところを、一旦文字に書き起こし吟味することによって自らの発話を自覚的に捉え、修正し表現力を高めてゆく指導が求められよう。また、話し方の一つひとつに配慮ができる教育実践者を育成したいと考える。そこで、動画教材を作成することにより先に述べた実践力を育成するものである。

動画作成の実際については次節以降で算数科及び国語科の実践について具体的に説明をすることとなるが、そのプロセスはおおよそ以下に示すものである。

動画教材作成による授業力の養成プロセス

動画教材の企画・作成

- | | |
|----------|--------------------------|
| ①テーマの設定 | 学習指導要領に準拠し、学年を設定する |
| ②絵コンテの作成 | 動き・動画内教具の提示などのイメージを具体化する |
| ③台本の作成 | 言葉による表現を吟味する |
| ④撮影 | 表情、発声などに配慮する |

動画教材完成後

- ⑤動画教材を活用した学習指導案の作成
- ⑥学生間のピアレビューとディスカッション
- ⑦現任教員による評価と学生へのフィードバック

動画教材の企画・作成段階については、実際の授業の準備段階（①テーマの設定から③台本の作成まで）と実施段階（④撮影）とで構成される。準備段階で求められるのは教材研究であり、実際の授業で活用するにふさわしいものであるかを検討する必要がある。澤崎眞彦氏は、「教材開発を行う、あるいはその過程においてまず念頭に置かなければならない事柄」として以下の3点を挙げている³。

- ①意図的対応性：学習指導の目標に対応しているか
- ②典型性：学習内容を典型的に反映しているか
- ③問いの誘発性：子どもの好奇心・探究心を喚起するか

3 日本教材学会編『教材学概論』第7章澤崎眞彦担当執筆（図書文化社、2016年4月、86頁）

動画教材の作成と実際の授業をする際の教材作成とが異なる点としては、実際には児童が存在し、児童に対する認識及び理解に基づいてなされることである。従って、動画教材を作成する場合は、①②については十分に配慮をすることができるが、③については不特定が対象となるので想定に基づくことしかできない。このような制約がある中ではあるが、教員としての実践力を育成するための実践として、算数科及び国語科の取り組みを以下に報告する。

3 算数科における動画作成の実践と意義

3.1 動画作成の実績

算数科では2016年度、2018年度に初等教育学科2年生開講科目「教科教育学演習Ⅰ」及び「教科教育学演習Ⅱ」において今崎ゼミで行った。ここでは、2018年度の実践について述べていく。なお、動画作成にあたっては、2で述べた「動画教材作成による授業力の養成プロセス」に基づいて行った。

プロセス①「テーマ設定」については、教員が「算数科において文化的目的の達成に資する内容」と大枠を設定した。2106年度の実践においては、テーマ、動画の内容について学生に自由に決めさせた。そのため、内容決定までに必要以上に時間がかかり、授業及びその事前・事後学修の時間を含めても動画を完成させることができなかった。また、完成した動画の内容も興味深い問題を扱った内容、学力調査等において正答率が低い問題を扱った内容、算数・数学の歴史に関する内容と多岐にわたってしまい、内容の系統性に欠け、学校現場において実際に扱うことが難しいといった課題がみられた。

そこで、本年度は10名の学生を5人ずつのグループに分け、教員が設定したテーマに沿ってそれぞれのグループで内容を検討させた。1つのグループは「和算」、具体的には鶴亀算を取り上げ、和算とは何か、解法の面白さを伝える内容とすることになった。もう1つのグループは「インドに伝わる数学」、具体的には0の発見、インドに伝わる筆算を取り上げ、0の発見の意義、筆算の仕組みを伝える内容とすることになった。



作成した動画のタイトル画面及び内容の一部

プロセス②「絵コンテの作成」については、各グループで誰がどの位置に立ち、どのように動くのか、さらには重要な用語や解法の手順についてアニメーションやテロップでどのように表現するのかについて具体的に考え、絵図や言葉で表した。

プロセス③については、NHKの小学生対象の番組「for school」を参考に、学校現場で無理なく活用することができ、児童が視聴に耐えられるであろう時間を考慮し、10分程度の動画とすることを条件とした。また、出演者の一方的な解説に終わらないよう、グループのなかで進行役、先生役、子供役等を設け、それらの対話を通して内容が進行していくような台本を作成した。

プロセス④「撮影」については、広島放送株式会社の山田将史氏に依頼をし、撮影を行った。撮影はリハーサルに1コマ、本番の撮影に1コマを充てた。プロセス③において、それぞれの役が話す台詞については決めていたものの、実際に撮影を行ってみると動きや対話に不自然さが見られたり、子供を惹きつけるような表情や話し方ができなかつたりする等の問題が明らかになり、山田氏、教員の指導のもと、修正を重ねながら撮影を行った。なお、動画の編集、アニメーションやテロップの作成は山田氏に依頼した。

撮影後、完成した動画を視聴した後、本実践を通して学んだこと、特に授業を行う際に活かしていきたいことについて、振り返りをさせた。完成した動画は、本学ホームページ、YouTubeに掲載し、他者からの評価を受けることとした。



撮影の様子（2018年11月撮影）

3.2 動画作成を通じた教材研究の意義

動画作成を通じた教材研究の意義として、2つのことを挙げたい。

1点目は、学生に算数科において文化的目的を達成していくための素養を培うということである。

本実践においては、テーマの大枠を3.1で述べたように教員が設定した。文化的目的の達成に資する内容とした理由としては、本学学生の実態と、その背景にある学校現場での指導上の課題によるものである。筆者は本学において、8年間算数科教育法を担当し、毎年「なぜ算数を学ぶのか」というテーマについて学生に議論をさせてきたが、残念ながら文化的目的に一度も触れられたことがない。このことは、これまで学生自身が算数・数学科を学習するなかで文化的価値を認識するような学習を経験することがなかったことによるものであろう。教科用図書には数学の文化的価値に触れさせるような教材が各社掲載されているが、それらは極めて短時間で読んで終わったり、場合によっては授業で扱わなかつたりする状況もあるということが学生の授業後の感想からも分かる。このことにかかわって、狭間節子氏は次のように述べている⁴。

数学教育の目的として最も意識されにくいのが文化的価値の側面であろう。人間の営みとして数学がどのように生まれ、文化をつくり、その発展に貢献してきたのか、数学教育において、文化的遺産を継承し、発展させるとはどういうことなのか、こういった文化的価値にこれまであまり注意が向けられなかったこと事実であろう。

4 中原忠男編『算数・数学科 重要用語300の基礎知識』「文化的目的」狭間節子担当執筆（明治図書、2008年6月、104頁）

また、平成29年告示の小学校学習指導要領に示された算数科の目標の中にある「数学のよさに気付く」ことを達成するために、同解説算数編では「数学は人間によって生み出された価値あるものであり」、「算数を学習し、数学が人間にとって価値あるものであることが分かり、主体的に算数の学習に関われるようにすることが重要である」と算数科の授業の在り方を述べている。

これらのことから、将来教壇に立つ学生自らが、動画作成及びそのための教材研究を通して、数学が先人の営みのなかから生まれてきたものであるという数学観をもち、先人の数学的な発見や創造、そこに至る喜びや困難さを理解していくことは、数学教育の課題を解決し、これから求められる算数科の授業を構想していく素養を培うという点で意義深いと考える。

2点目は、授業を具体的に構想する力を育成するという点である。

本学の教職課程では、2年次に各教科の教育法において学習指導案の作成を行い、3年次に作成した学習指導案に基づいて模擬授業を行うこととしている。また、模擬授業を行う際には、担当教員に複数回の事前指導を受けることとしている。筆者もこれまで8年間事前指導を行ってきたが、学生は学習指導案を作成しているものの、実際に、どのような言葉で児童に語りかけ、どのタイミングで教材を提示したり、板書をしたりするといった具体的な教授・学習活動の内容まで構想することがほとんどできていなかった。そのため、1つ1つの教授・学習活動につながりが見られなかったり、児童の反応を想定し、児童の反応に応じて授業を進めることができず、教師主導の授業と落ちいってしまったりしている。つまり、実際に授業を行うためには、学習指導案を作成した上で、さらに具体的なストーリーを考え台本を作成する、学校現場では学習指導案細案（密案）と呼ばれたりするものを作成する必要性を理解させ、それを作成する力まで育成することができていなかったという、学生に対する指導上の課題があった。

本実践では、3.1で述べたように、学生が動画の絵コンテ及び台本の作成を行っている。台本は教師の発問、指示や説明、期待される児童の反応を記述したものであり、絵コンテは板書や掲示物の内容とそれらを提示するタイミングを記述したものであると言える。これらを作成する活動は学習指導案細案（密案）を作成する活動に当たり、授業を具体的に構想する力の育成に資するものであると考える。

3.3 動画作成の効果

ここまで本実践の概要及び動画作成を通じた教材研究の意義について述べてきた。その効果について、動画撮影後の学生の振り返りの記述から述べてみる。

(1) 教材研究に関すること

〈学生の記述〉

S1 教材研究をすることの大切さを学んだ。分かりやすい説明をするためには、自分自身がしっかりと教材の内容を把握する必要がある。

S2 教材研究のなかで、頭にあることを言葉や文章にすることが一番大変だった。

S3 なぜこの内容を取り上げるのか、この内容を通して学んでほしいことは何か、そしてそれをどこで伝えるかを考えることができた。

S4 教材を選ぶ時には、いくつかの和算を取り上げたのですが、準備をする段階で1つに絞って、それを丁寧に伝える方がよいことに気づき、これは授業に似ていると感じました。

S1からS3の記述から、教材研究の重要性を理解するとともに、具体的な教材研究の方法の

1つを体験することができていることが分かる。また、教材研究が進んでくると取り扱いたい教材が増えてくる。しかし、授業のねらいを達成するためには教材を取捨選択しなければならないが、S4の記述からその必要性に気付いていることが分かる。

(2) 授業の構想する力に関すること

〈学生の記述〉

S5 ビデオのシナリオを作ることが授業のシナリオを作ることにつながるということが身をもって理解できた。急に問題や疑問に入るのでは、その問題についての興味もわかない。小さな不思議をいかにして「問題を解こう。」につなげるかが大切であると思った。これは授業をする際の導入とリンクしている（以下筆者省略）。

S6 小学生の反応を予想しながら、授業展開を考えることで、実際の授業にも役立つ力を付けることができた。

S7 子供とのやりとりを増やしたことで、どういった時に、どのような疑問が出てくるのかといった点について考えを深めることができた。

S5のように動画の台本づくりを授業づくりと重ねて考えることができています。S6・S7では教師の発問、指示や説明に対する児童の反応について考えており対話的な授業をつくっていることが分かる。これらのことから、授業を具体的に構想する力の育成に効果が見られることが分かる。

(3) 表現力に関すること

〈学生の記述〉

S8 ビデオで表現することは、授業中児童の前で演じる教師の姿と同じだと思う。授業づくりも教師の表現力が大切であると思う。

S9 声の音量や抑揚、そして顔の表情も少し変えるだけでイメージや雰囲気が変わることが分かった。山田さんのようなレポーターを身に付けたい。

S10 動作を大きくしたり、分かりやすい口調で話したりすることも小学生には大事になってくることが分かった。

S12 普段、同級生や先生と話す速さでビデオを撮ると子供達はついていけないので、ゆっくり丁寧に話すことができた。授業でも生かしていきたい。

S13 実際に動画を撮影してみると、台本通りにいかないことが多く、アドリブで対応することで表現力が高まったと考える。

S14 人前に立つことに苦手意識がありましたが、今回の撮影を乗り越えたことによって、自信を付けることができました。教師は演じることが大切であるということ学び、そうした力も付けることができたと思います。

いずれの記述も動画作成が授業づくりに繋がることや、授業づくりにおいて教師の表現力は重要な役割を果たすことについて理解を深めていることが分かる。S9からS12は声量、話す速さ、抑揚、顔の表情や動作等について具体的にどのようにしたらよいかを学んでいることが分かる。S13は臨機応変な対応について、S14は人前に出て話すことについて、自信を持ち始めていることが分かる。

4 国語科における動画作成の実践と意義

4.1 動画作成の実績

授業力育成を目的とした動画を作成することの意義は、国語科に限られることではない。教材研究を緻密におこなうことなどは、方法は異なるであろうが全ての教科に求められることである。一方で、国語科の内容には〔思考力、判断力、表現力等〕に「A話すこと・聞くこと」が位置づけられていることから、「話すこと」に特に配慮をした動画作成が求められよう。また、〔知識及び技能〕には「(1) 言葉の特徴や使い方に関する事項」があることから、説明に用いる語に意識を向ける必要があるだろう。つまり、教師自身がこれらの事柄に関わるモデルということである。もちろんこのことは国語科に限ることではなく全ての教科で配慮をしたい事項ではあるが、国語科の教材動画には一層の配慮が求められるところである。

教師の話し方について高橋俊三氏は、教師が生徒に向かって話をする際の留意点として、以下の点を挙げている⁵。

- (1) 話の内容を分析し、聞き手の立場で構成すること。
- (2) 話目的を考え、材料を精選すること。(極力短く話すよう心がけること。)
- (3) 聞き手の発達段階に合った言葉を選ぶこと。
- (4) 聞き手の一人ひとりを尊重すること。
- (5) 自分や内容や聞き手の総てに対して誠実であること。また、明朗であること。

動画教材を作成する際にも、完成後教室で活用することを考えれば上の5点に留意すべきことはいうまでもない。このような話し方に加えて、細部にわたっては身振りや表情、視線などにも配慮が必要となろう。従って、先に示した「動画教材作成による授業力の養成プロセス」のうち、「④撮影 表情、発声などに配慮する」に示した配慮事項は、具体的にはこれらの事柄を指している。

国語科の動画撮影は、2016年度から始め今年度まで作成途中のものを含め8本を作成しており、これらは初等教育学科3年生後期開講科目「教科教育学演習Ⅳ」の国語専修橋村ゼミにおいて作成した。動画教材は、学生が一人一本企画立案することとし、撮影では互いに出演しながら作成をした⁶。以下にタイトル⁷、動画の長さ、概要を記した。なお、2016及び2017年度については学生が出演したものであるが、2018年度作成の動画についてはパペットを使用したものとなっている。そのため、先の配慮事項のうち2017年度のみ身振りや表情などについては指導していない。

2016年度

タイトル：みんなで考えよう「いい」と「よい」の使い分け」3分58秒

概要：日常的に使用する「よい」と「いい」の違いを歴史的な変化や話し言葉・書き言葉といった観点からその違いに気づかせる教材。

タイトル：みんなで考えよう「広島方言について」3分34秒

5 国語教育研究所編『国語教育研究大辞典』（明治図書、1991年7月、203頁）

6 2017・2018年度の動画の撮影及び編集作業は本学講師 Lyndon Lusk Lehde 氏によるものである。記して感謝申し上げます。

7 2017年度はタイトルを付していないのでテーマとしている。



パペットを使用した動画教材作成の様子（2019年1月撮影）

概要：江戸時代成立に成立した『秋夜長話』に記載されている安芸方言に基づき、現代の広島方言と比較することによって方言が変化していることを気づかせる教材。

タイトル：みんなで考えよう「虫食い？虫食べ？」 3分36秒

概要：「食う」「食べる」の二つの語について、その意味の違いを「虫-」「-逃げ」「つまみ-」などの語の複合の観点から分析し、意味の違いに気づかせる教材。

2017年度

テーマ：よく考えると通じないけど通じる言葉（語用論） 3分46秒

概要：日常会話には「私はピアノだ」のような趣味を話題としている前提で成立するような表現があることを説明し、改めて日常会話に目を向けさせる教材。

テーマ：オノマトベが持つイメージ（オノマトベ） 6分43秒

概要：オノマトベの例を挙げつつその役割を確認し、実際には使用されないオノマトベを造ることによって、オノマトベに含まれる音声イメージと結びついていることを気づかせる教材。

テーマ：身近にある方言（気付かれない方言） 3分26秒

概要：学校にあるものに関わる地域的な語形、例えば黒板消し＝ラール、模造紙＝とりのこ用紙等を挙げて方言と共通語との違いに気づかせる教材。

2018年度（現在作成中）

タイトル：つかおう！つなぎ言葉

概要：接続詞の役割について、前文と後文を変えずに接続詞を置き換えることによって文意がどのように変化するか、また接続詞と後文の前文を考えることによってその機能を考えさせる教材。

タイトル：なんと読むのだろう、この漢字

概要：「土産」を例に、熟字訓の成り立ちを中心に解説し、漢字の読みの多様さに気づかせ関心を持たせようとする教材。

2018年度の動画教材については、作成過程の絵コンテ作成に加えて、その次の段階にPowerPointを作成した。そうすることによって、文字の表示のタイミングや動きなどがよりイメージしやすくなった。動画の細部を確認してゆく作業は、児童に対する提示の方法やタイミングを配慮することにも繋がると考える。学生が作成したPowerPointのスライドの一部を以下に例示する。

テスト勉強をしなければならない。
(だから) つくえの上をかたづけはじめた。



4.2 動画作成を通じた教材研究の意義

さて、国語科の特性からみた動画教材作成の意義としては、話し方に配慮することを先に述べたが、以下に実際の例に則して説明をしてゆく。以下に掲げる対話は「タイトル：なんと読むのだろう、この漢字」の学生が作成した台本の一部で、修正前と修正後のものである。

【修正前】

A：献上という言葉の意味は知っていますか？

B：知りません。

A：献上とは、神様や身分の高い人にものを差し上げることです。昔、この献上という漢字をこのように見上（ケンジョウ）と書いたことがありました。それを訓読みしてミアゲと読み、そこから音の変化によりミヤゲと言われるようになったのです。（以下略）

【修正後】

A：「みんなは、献上という言葉聞いたことがあるかな？」

B：「献上？」

A：「例えば、神様に魚を献上する。などに使われていて、献上の意味は人にものを差し上げるという意味があるんだよ。」

B：「献上と土産にどんな関係があるんですか？」

A：「ユッキー君、それはこれからの説明でわかるよ。みんなもよく聞いていてね。」

B：「わかりました。」

A：「これから話すことは有力な一説なんだが、昔、この献上という漢字をこのようにケンジョウ（見上）と書いたことがあったんだ。」

B：「見上げると書いてケンジョウですか？」

A：「ん！？いま、ユッキー君なんて言った？」

B：「見上げると書いてケンジョウ。」

A：「そう！この漢字（見上）を訓読みするとミアゲと読むことができるね。その土地の物をよく見て、考えて選びあげた物のことを言っていたんだよ。」

B：「今の土産と意味が同じですね。」

A：「ミヤゲという言葉が生まれたのはこのミアゲが変化してミヤゲと読まれたからなんだ

よ。』

B:「へー。そこからミヤゲという言葉が生まれたんですね。でも、なんでミヤゲという読み方と土と産という漢字がくっついたんですか?」

A:「昔の辞書には、この言葉（土産）の読み方としてトサンと書かれていたんだよ。」

B:「へー。」

A:「一方で、別の辞書ではミアゲと書かれているものもあるんだよ。」

B:「ということは昔は土産という言葉はトサンとミアゲの二つの読み方があったってことですか?」

A:「そういうことだ。だけど、トサンとミアゲの意味は同じだとされ、トサンとミアゲが一つに合わせられミヤゲになったんだよ。」(以下略)

修正前のAの発話は動画の核となる部分に関わるものであり、この発話の理解が動画全体の理解に関わる非常に重要なものである。しかし修正前は一つの発話に含まれる情報量が多く、聞き手に配慮をした表現とはなっていない。児童はよほど集中して発話を聞き取らないと理解することはできないであろう。これは台本が文字言語であるために、盛り込んだものであると考えられる。文字言語の場合は学習者が躓いたとしても読み返せば問題は生じないが、音声言語の場合には配慮が必要となる。伝えるべき情報量を減じることなく確実に伝える方法は、実際の教室であれば一文をより短くする、説明のスピードを遅くするなどが考えられる。この度の動画については、修正後のように、会話のターンを入れることによって発話を分割することによって聞き手に対して配慮をしているため、話し方としては大幅に改善されているといえる。授業者が説明したいことを説明するのではなく、児童にどのように受け入れられるのかを想定し、発話することに配慮されているといえよう。

4.3 動画作成の効果

台本の作成と教室における発話との関わりについて以上述べたが、動画教材を作成するプロセスにおける配慮すべき視点と授業分析は共通する部分がある。授業分析の視点は多岐にわたるので、動画教材の視点はそれに包摂される関係にある。動画教材の視点は、授業分析の視点のうち、主に授業者の視点に集約されると考える。田中智生氏は、授業者についての分析として以下のように述べておられる⁸。

授業者については、どのように教材をとらえているか、どのように学習者をとらえているか、それらの認識の上に立って、どのような目標を設定し、どのような学習活動を組織し、どのような支援を行い、どのような評価をしているか等の視点を設けることができる。

ここで指摘されていることは、動画教材を作成する際にも分析の視点として有効である。動画作成後には、このような分析の視点に基づき動画教材を評価し、改善へと繋げてゆく必要がある。但し、動画教材作成のプロセスにおいては動画教材そのものが分析の対象となりうるが、動画を活用した実際の教室においては動画が教材となる。教材を効果的に活用できるか否かは指導案との関わりが重要となる。教室での活用の有効であるかどうかという視点もさらには求められよう。動画教材の分析及び評価は、動画作成そのものと、実際にそれを活用する場

8 糸井通浩・植山俊宏編『国語教育を学ぶ人のために』（世界思想社、1995年12月、212頁）

面という入れ子型構造の評価となっているのである。そこで、動画を作成した学生の一部には3年次での動画作成の後、4年次の卒業論文においては学習指導案を作成し、どのように活用するのかを提案する学生もいる。その場合には、授業における動画教材の妥当性という評価の視点も加わることとなる。

5 ま と め

5.1 成 果

本実践は、今日求められている「主体的・対話的で深い学び」の実現にむけて、将来教壇に立つ学生の資質・能力の向上に資する取り組みであったと考える。

まず「深い学び」の実現に向けた授業改善を進めていくためには、教材研究の充実が欠かせないことは言うまでもない。このことについて、本実践では3、4でも述べたとおり、学生が児童の視聴を想定し、内容の決定、絵コンテ・台本の作成等の活動を通して、実践的な教材研究を進めることは成果であったと言えよう。また、小学校学習指導要領において視聴覚教材の開発や適切な活用が求められていることから、学生自身が動画教材を作成する体験をしたことは、教員生活のなかで生きて働く体験になるであろうと考える。

次に「主体的・対話的な学び」の実現に向けて、教師の果たす役割、なかでも教師の「話し方」は特に重要である。野口芳宏氏は教師の話し方の重要性について次のように述べている⁹。

教育の方法の基本が言語そのものに基づいている。

教育における「話すこと」は教育の原点であり、時代がいかなる進歩を遂げようとも縁を切るわけにはいかない必要不可欠の手段である。

また、広島市教育センター作成『授業研究ハンドブック』¹⁰では、「授業評価（教師の自己評価）表」を示し、教師の話し方についての評価項目として、次の3項目を挙げている。

- ・児童生徒がよく分かるように言葉を選んで話をした。
- ・児童生徒の様子を観察し、理解の状況を十分に把握しながら話をした。
- ・声量・間・速さ・表情などに気を付けて話した。

このような授業評価表に基づいた授業改善の取り組みは自治体単位、学校単位で全国的に行われていることから、適切な話し方は教師として身に付けるべき資質・能力の1つと言える。

本実践は3、4でも述べたとおり、学生自身が自らの話し方について映像を見て振り返ったり、教員や映像作成の専門家から指導・助言を受けたりすることを通して、学生が授業における教師の話し方の重要性を理解するとともに、話し方の技能を改善・向上させていることから、有意義な取り組みであったと考える。

5.2 課 題

2018年11月に中央教育審議会が取りまとめた「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン

9 野口芳宏『授業の話術を鍛える』（明治図書、2016年10月、23頁）

10 広島市教育センター作成『授業研究ハンドブック』、<http://www.center.edu.city.hiroshima.jp/kennkyu/index.html>、（2019年1月取得）。

(答申)」のなかで、地域における高等教育の在り方について「各高等教育機関は地域の人材を育成し、地域の行政や産業を支える基盤である。これを十分に機能させていくためには、常に地域において何が必要とされているのか、地域に対して当該高等教育機関が何を提供できるのか、等の観点についての情報共有と連携が欠かせない」と述べている。

こうした視点から本実践を振り返ってみると、今後取り組むべき課題として次のようなことが挙げられる。

(1) 動画教材の活用及び評価

本実践は教員養成課程に学ぶ学生の教員としての資質・能力の向上を図っていくことをねらいとして取り組まれたものであり、地域の学校へ実践力のある人材を提供していくという面では、一定の評価を受けられるものであると考える。しかしながら、「動画教材作成による授業力の養成プロセス」の⑤～⑦についての取り組みは十分とは言い難い。今後は、それらの取り組みの充実を図るとともに、地域の学校へ作成した動画を配信するなどして、学校現場での評価を受け、改善を図っていく必要がある。さらには、学校現場でのニーズを把握し、大学が提供する動画等の教育コンテンツについて検討していく必要がある。

こうした取り組みは、大学における学修成果の可視化、教育の質保証の取り組み、大学、地域の学校のICTの活用を促進する取り組みの1つになると考える。

(2) 動画教材等の教育コンテンツの充実

本実践で作成をした動画はこれまでに作成したものも含めて15本である。教科も国語科、算数科の2教科である。学校現場において教科等の学習内容に沿って、計画的に活用されるようにするためには、不十分であると言わざるを得ない。近年学校現場ではICTを活用した学習指導が推進されており、特に2018年度から全面实施されている道徳科、2020年度から小学校において全面实施される英語科の指導に関する動画は、学校現場でのニーズが高いことが予想され、そのニーズに応えていくことが大学の果たすべき役割であると考えている。

今後は動画を含め幅広い教育コンテンツの充実に努め、学生の資質・能力の向上を図るとともに、地域へ貢献していくことが必要であると考えている。

—平成31年1月25日 受理—